

## 『縁起と空——如来蔵思想批判——』

松本史朗著・大蔵出版

※著者への手紙※

前略 あなたの初めての単独の御著書『縁起と空——如来蔵思想批判——』を拝受してから早いものでもう一年近くになります。同じ出版社の同じシリーズで出た袴谷憲昭先生の御著書『本覚思想批判』とは違って僕のはそう売れないだろう」と穏やかに言われたあなたでしたが、袴谷先生の御本と同様、増刷されたそう喜んでいきます。あなたらしい簡潔な美しい献辞の入ったこの御本を贈っていただいて先ず驚いたのは、既発表の論文を集めた論文集と聞いていたにも拘らず、書き下ろしの新作が三篇も付け加えられていたことでした。しかも私にも既に馴染みの「如来蔵思想は仏教にあらず」（一一九頁）、「縁起について」（一一九七頁）、「仏教と神祇——反日本主義的考察——」（九九一—一九九頁）、「勝鬘經」の一乗思想について」（二九九—三三四頁）、「空について」（三三五—三七一頁）という旧作の五篇に付け加えられた新作の三篇「实在論批判——津田真一氏に答えて——」（二二一—一九〇頁）、「解脱と涅槃——この非仏教的なるもの——」（一九一—二二四頁）、「般若經」と如来蔵思想」（二二五—二九七頁）がいずれも長大な力作で本全体の半分近くも占め

るということでした。あなたの御論文をいつも心持ちにしているファンとしては、三本もまとめて新作が読めるのに感激すると共に、こうであれば定価の五千数百円も決して高いものではないな、と思ったりもしたのです。

あなたのものをこんなにも纏めて読むのは、あの平易でありながら極めて斬新な切口から仏教の実践論を解き明かした奈良康明先生との共著『仏教の実践』（東京書籍 昭58年）以来のことです。あれからももう七年も経つのですね。その間にあなたはご家族とご一緒のウィーン留学や、その他の苦渋に満ちたことどもを体験されましたね。あなたに頼まれてウィーンのあなた宛に藤村の『エトランゼ』を送ったことが懐かしく思い出されます。私が今手にしているあなたの御本の表紙の黒と共にある沈んだピンクは、あなたが希望されたという『若菜集』のイメージを実に見事に体現していると思います。新作の三篇を含む仏教教理の中核をなすであろうことどもを巡るこの御本は、あなたがいみじくもその「あとがき」で率直に漏らされたように、あなたの三十代の最後を飾る記念碑、仏教とキリスト教とに型どられたあなたの宗教的時間と苦い個人的時間と

金 沢 篤

によって織り成された綱の上の「厳肅な綱渡り」の記録であろうと私は深い感慨と共に受け止めました。

あなたの独自の作業仮説的用語「ダートゥ・ヴァーダ」(dhat-  
[vada])を用いての論及の数々は、あなたの宗教的時間や個人的  
時間とは遙かに離れた所にあるだろう、いわゆる「客観的学問」の  
世界においても十分にその成果をあげたものと思われまます。あなた  
の敬愛する袴谷先生が多用される「批判」という言葉も、あなたは  
敢えて避けませんでした。でも、この「批判」というのは何なので  
しょうか。学問の世界で、「批判」とは、「誤解」を正すことの意味  
で用いられるのが普通です。だが、「誤解」そのものも仲々に口に  
するの骨のいる言葉です。「誤解」に対しては「正解」というも  
のが対置される筈ですが、主として古代の文献の解釈を巡って議論  
の展開するわれわれの「学問の世界」では、「正解」とは一体何を  
意味するのでしょうか。あなたによって見い出された「如来蔵思  
想は仏教にあらざ」というスキャンダラスなスローガン自体は、あ  
なたも十分に承知のように、学問的にはほとんど何の意味も持ちま  
せん。「釈尊の思想」、「若き釈尊の思想」、「晩年の釈尊の思想」、  
「釈尊のものとされる」の「經典の思想」、「この經典のこの部分に見  
られる思想」、「釈尊のものとされるこの言葉の意味」といったミク  
ロ(?)にまでも到る様な限定辞を付して始めて学問的意味を獲  
得し得るわけですからね。おおよそ、言葉使いの名手である人間はど  
のような言葉であれ、どのような意味をこめてでも用いることが出  
来るのです。ほとんど偶然的に選び取られた別の言葉の集成とも言  
うべき辞典の言葉で置き換えただけのような「和訳研究」の氾濫し  
ているかのようなわれわれの学問の世界に、あなたのこの御本が重

要な波紋を投げかけたであろうことを私は信じて疑いません。あなた  
の御本に対して表立っての反響が未だ確として現れていないこと  
も、「AならざるものをAから截然と分かつ」ものとしてのあなたの  
「批判」的研究が見事に効を奏した証であろうと考えます。袴谷  
先生がお好きなデカルトなどを持ち出して敢えて「批判」の意味を  
付度する必要など全然ない世界なのです。明確な方法意識に基づい  
てなされた明確な学問的研究の帰結がそうそう簡単に覆されること  
はない筈ですし、その段階で指摘・表明された疑問がそうそう易々  
と解明される筈もないからです。

私の先生の前田専学博士がその『インド思想史』の「序」でホイ  
ットニーのものとして引かれた「インド文学史において与えられて  
いるすべての年代は、再び打倒されるために立てられたポウリング  
のピンである」ということばは、ただ「年代」に関してのみ妥当す  
るものではないのです。二千年以上もの間多くの人の口の端に上  
り、親しまれてきた「仏教」という言葉を始めとする数多くの言葉  
の意味の解明としてあるわれわれの文献学的研究を、あなたは実際  
この上なく見事に実践したように思います。数年前からわれわれ  
は、そうした学問研究の方法を、「極微文献学」(Micro-philology)  
と呼び慣わしてきましたが、そもそも「極微」でないような「文献  
学」などはないのでした。その言葉を見事な実例と共に最初にわれ  
われに教えてくれたのはハンブルグ大学のヴェッツラー博士でした  
が、先頃しばらくぶりに博士の研究成果をまとめて拝聴する機会が  
ありました。やはりそうした学問的方法を明確に意識し続けること  
のいかに困難であるかを実感させられましたね。やはりそのヴェツ  
ラー博士の講演の一つを聴いたというわれわれの昔からの共通の

友人であるK大学のA氏よりの私宛の電子メールにも、「今回のペーパー……は必ずしも「微細文献学」の成果ともいえないような気がするのですが（少し粗雑ではなかったでしょうか）……」とあって共感を覚えたものです。

学術論文に「批判」は付きものですが、今回のあなたの御本でもしあなたに「非難」されるべき点があったとすれば、それはあなたがいつ知らず「粗雑」になった箇所だろうと思います。その逐一の箇所を指摘する場ではないのでここに述べないことをあなたは恕してくれることでしょう。私自身はあなたのこの御本を高度に専門的な内容を持つ学術論文集として受け止めています。出版社側の意向はどうなのでしょう。その「あとがき」であなた自身、「この書物は個人的な動機にもとづくもの」と規定し、「個人的動機によらない著作や学問というものは、すべて不純なものではなからうか」とまで言われましたが、この点も学問研究の成果だけを問題にしようとする学者たちの好ましからざる反響を生むかもしれません。だが、逆にこの書物の随所に垣間見ることの出来るそうした美しいことばで飾られたあなた自身の思想と信仰こそが、私のような、専門的な知識を持たぬ一般の読者には、むしろ意義深いものだったような気がします。

あなたが仏教学を講ずる大学の先生であり、曹洞宗の僧籍をも持つ仏教学者であることを熟知している私ですが、そこに表明されたあなた自身の思想と信仰とを、あなたが「それだけが真の仏教者のものだ」などとは微塵も考えていないこともまた重々承知しているつもりです。自分の分をしっかり弁えた上で、この手紙をいつものがらのあなたからの励ましの電話の後に、直ちに書き始めたのは、

私にあなたのこれまでの学術的業績を誰よりも正当に評価出来るとの自負があったためではなく、私のうちに、この十数年にわたってあなたが私に示された友情にいつか応えたいという思いが強くなったためでした。バートランド・ラッセルのわが国における初期の紹介者であったあなたのおじい様、一代の文学者岩野泡鳴に対して果敢に思想論争を挑まれた故松本悟朗氏よりの影響を密かに強く自覚しているあなたは、本書においてわが国の代表的な幾多の学者の貴重な業績をしっかりと受け止め、およそ考えられる限りの公正さをもって、御自分の研究成果を示されました。私はそれらのどの一つをも場当たりのな付け焼刃の研究の所産だとは考えていませんが、あなたをチベット語文献の研究を中心とした「中観仏教」の専門家としてのみ見ていた読者があったとするならば、その読者たちの目には、原始仏教の高度に専門的な問題にまで大胆に言及するあなたの所作はいささか奇妙に映ったかもしれないと思うのです。

おそらくあなたの頭の中では、この御本の延長線上の新たな研究課題が渦巻いていることだろうと思います。それらの意義を私は蔑ろにするつもりは毛頭ありませんが、ここら当りでその「中観仏教の思想史」的研究を公刊して欲しいと考えている読者もまた少なくないだろうと想像する昨今です。

以上簡単過ぎて恥ずかしくて身の竦む思いですが、ただあなたの御本の紹介のためだけにこの手紙を認めた次第です。くれぐれも健康に留意されて、御研究にいつそう励まれますように。どこかで耳にした「ニヒリスト」という称号はあなたには似つかわしくないように思います。

一九九〇年六月二十六日深夜 所沢にて

早々